

追悼 赤松金芳先生

大村 敏郎

当学会名誉会員赤松金芳先生は平成六年七月十一日午後八時十分、九十八歳の天寿を全うし安らかに永眠された。先生は明治二十九年三月十二日、大阪市西区裏新町一二五番において父芳太郎様・母寿様の長男として生まれた。先祖は代々漢方医であった。

大正元年十一月、大阪道修薬学校薬学科卒業。大正四年、薬剤師試験合格。大正六年、工業薬品商開業。大正十五年赤松工業薬品商店設立、社長に就任。昭和二年、富士川游先生に「鎌倉は日本で一番良いところだから鎌倉に来るが良し」とすすめられて、富士川先生の居住する鎌倉に転居。以後富士川先生の御存命中ずっと影法師のように行動を共にしながら医史学の研究活動を続けたのであった。ドイツ語の勉強も薬学史の研究も富士川先生の指示に従って、特に古典の筆写から始めて、千葉医科大学薬

物学教室の専攻生として昭和三年から十年まで和漢薬の研究に従事する。

以後の活動は多方面にわたっているので医史学に限って述べると、昭和六十年にご自身で書かれた「医史学と私」（日本医史学雑誌三四巻二号）に詳しいが、日記にしっかり記録されていること、それが戦争とその後の混乱期を乗り越えて残っていることに感銘をうける。それによると昭和四年の中山文化研究所で



赤松金芳名誉会員

の医家先哲追薦会に出席、この機会に日本医史学会に入会。文献としては昭和七年九月の「古書に見えたる薬理学的実験」(中外医事新報一七七八号)がデビューであった。昭和八年秋、東北帝国大学での医史学講演会に富士川先生・藤浪剛一先生の講演があつたが、この会にはまだ若い大島蘭三郎先生も出席していて昵懇の間柄になつた。

昭和十二年四月から『中外医事新報』の編集委員に就任。

昭和十五年富士川先生死去。日本医史学会の追悼会で恩師への追悼の言葉を述べた。昭和十六年、当学会の機関誌が『中外医事新報』から『日本医史学雑誌』に改名し、その一月号(二二八七号)から七回連載で「富士川先生語録」を発表した。同年幹事に就任。このように、富士川先生のこと、戦前戦後の当学会のことに関する貴重な「語り部」であつた。研究テーマとしては宇田川榕庵など薬学史・化学史・和漢薬のものが多い。

戦後は教育活動が中心になり、昭和二十三年昭和女子薬学専門学校(現昭和薬科大学)教授、同じく京浜女子家政理学校(現鎌倉女子大学)教授に就任。日本医史学会では昭和二十八年に評議員、昭和四十三年に理事、昭和五十一年には名誉会員に推薦された。

昭和五十四年春の叙勲で勲三等瑞宝章を授与される。著書に『新訂和漢薬』(昭和四十五年)、『新訂和漢薬処方集』(昭和五十五年)がある。

昭和五十二年白内障で両眼手術、翌年左眼網膜剝離手術、眼底出血のため左眼失明。昭和六十二年大腿骨頸部骨折手術など身体上の障害に負けずに頑張られた。

平成二年十月、日本医史学会富士川游先生没後五十年記念会に資料多数提供。

平成五年九月、御令室豊子様死去(九十一歳)。

平成六年七月八日、三十九度の発熱のため近医に入院。十一日、肺水腫・肺炎のため鬼籍に入る。葬儀は七月十三日に執り行なわれた。

慶應義塾大学との関係は、医学部開設時から医史学講義を担当した富士川先生に縁があるということで、昭和四十三年医学部北里記念図書館へ所蔵の富士川本二百冊を寄贈されたほか数回あり、最後は昭和五十四年六月であった。慶應義塾大学医学部北里図書館では平成六年『古医書目録』の改訂をしてその一冊を赤松先生にお届けしたところ、読む視力は殆ど残っていなかったたので、手で触りながらご家族の方に読んでもらって大変に喜んで居られたとのことである。心からご冥福をお祈りする。

(慶應義塾大学医史学研究室・日本医史学会理事)